

バガヴァンは常に私たちと共にいます

R.J.ラトナカール氏



バガヴァンは、カーストや信条、国籍や宗教、言語にかかわらず、すべての子どもたちに聖なる愛の恩寵を等しく降り注がれます。太陽にとって、光と暖かさをすべてのものに等しくもたらすのは自然なことです。太陽が昇ったとき、ある人々は生活費を稼ぎに出かけ、ある人々は良い仕事に従事し、ある人々はその同じ光を悪いことをするために使います。そうであっても、バ

ガヴァンは愛深さゆえに、良い者にも、悪い者にも、すべての者に等しく恩寵を降り注がれるのです。スワミの愛の純粹さには、どのような汚点もなすりつけることはできません。

バガヴァンの愛はすべてものを惹きつける

バガヴァンは聖なる甘露で満ちあふれています。バガヴァンの愛を経験したとき、私たちは想像を絶する喜びに満たされます。この無上の喜びのために、私たち帰依者は、世界中のあらゆるところから、何度も何度もプラシャーンティ・ニラヤムを訪れるのです。「花の蜜は、ミツバチに来て蜜を吸うように誘うことはありません。しかし、ミツバチの方が蜜を探してやって来ます」と、バガヴァンが言われるように、私たち帰依者は皆、バガヴァンに魅了され、今もなお、その同じ愛によって世界中から帰依者たちが引き寄せられているのです。

私たちが必要とするのは、揺らぐことのない信念と一意専心の帰依心です。熱烈な帰依心には、誰であろうとこの世のすべての人を変える力があります。

「一片の黒く冷たい石炭は、火に結びつくことにより、燃えさかる火のついた赤く熱い物体に変えられます」とバガヴァンが言われるように、帰依者は神への思いや良い思いと結びつくことにより、ますますエネルギーで満たされ、輝

いていくのです。

薔薇の花からその芳香を分離することはできません。それと同様に、有形と無形は分けることができません。バガヴァンの御姿を見て、いつでもバガヴァンの御姿を思い浮かべると、その美しい御姿は私たちの心を満たします。私たちはこのバガヴァンの無形かつ遍在の神性を経験しました。御姿が見えないからといって、バガヴァンが周りにいらっしゃらないわけではありません。無形のバガヴァンは、ますます一人ひとりの帰依者のハートの中で感じられています。それは、世界中のあちこちで何百万人という帰依者たちによって経験されていることなのです。

ロンドンのハイド・パークにおける啓蒙的な経験

これは、私にとって最も素晴らしく、啓蒙的な、バガヴァンの蓮華の御足への旅となった経験です。バガヴァンに意識を向ける時、私たちが経験するのは無限の愛と神性です。ここで読者の皆様と、バガヴァンが以前、私を祝福してくださった素晴らしい経験を分かち合いたいと思います。

それは、2000年の11月に私がロンドンへ行くことになった時のことでした。出発の前日、私はスワミに報告し、祝福をいただくためにバンガロールからブラシャーンティ・ニラヤムへ行きました。その日はいくつかの避けられない事情により、スワミにご報告することができませんでした。その夜、私はバンガロールからロンドンへ旅立つことになっていました。先に航空チケットを予約して、その後でバガヴァンの祝福を得るために来たのは私の過失でした。私をテストするかのよう、スワミはその日、祝福を得る機会を与えて下さらなかったのです。私は心の中でスワミの祝福を求め、ロンドンへの旅の間ずっと一緒にいてくださるよう祈りました。他にどうすることもできなかったので、私はすぐに旅立ちました。

ロンドン空港に降り立った時、私は再度バガヴァンに、旅の間ずっと一緒にいていただけるよう祈りました。ロンドンでは、2日間で自分の仕事を終えました。翌日は日曜日だったので、ロンドン観光をしたいと思いました。ハイド・パークは美しい公園であり、行くに値する場所であると聞いていたので、私はハイド・パークへ行きました。そこには、私のような観光客がたくさんいました。公園の中をぶらぶら歩いていた時、少し離れた場所に誰かがいるのに気づきました。たまたまその男性が私の方を見ていたので、私もその男性を見ました。実際、その男性は私の方を見つめながら近づいてきたのです。これは、私

にとって初めてのロンドンへの旅だったので、見知らぬ者同士がハイド・パークで出会うようなものでした。男性はゆっくり私に近づいてきました。身の丈は高くも低くもないといった感じでした。とてもハンサムで、巻き毛でした。その男性はまっすぐ私のところへ来て、目の前に立ちました。男性は私の目をじっと覗き込んで、こう質問しました。

「あなたは、バガヴァン シュリ サティヤ サイ ババを知っていますか？」
私は呆然としました。しばらくの間、ものが言えないほど驚いていました。ロンドンの町の、ハイド・パークの真ん中で、どうして見知らぬ人が私に近づいて来てこんな質問ができるのでしょうか！ それだけではなかったのです。その男性はスワミのお写真をポケットから取り出し、私に見せて、

「これがサティヤ サイ ババです」と言いました。いまだにこの出来事は、まるで昨日起こったことのように、鮮やかに私の脳裏に焼きついています。落ち着きを取り戻した後、私もスワミのお写真を自分の財布から取り出し、その男性に見せました。表情から察するに、男性は既にそのことがわかっていたようでした。男性は近くのサイ・バジャン・マンディールの住所を私に手渡して、「そこで帰依者たちがとても良いバジャンをしていますよ。行ってみてください」と言いました。男性は私の肩に手を掛けながら数歩一緒に歩いた後、「仕事がありますので…」と言って去っていきました。

その男性はいったい誰だったのでしょうか？ 誰がその男性に私のことを伝えたのでしょうか？ ロンドンに知り合いはいませんでした。それどころか、私はロンドンに行くことを誰にも伝えていなかったのです。プッタパーティやバガヴァンのことを、誰かに何気なく話したことさえありませんでした。これは、私にとってとてつもなく驚きに満ちた出来事でした。

バガヴァンを私たちのハートに大切に留めましょう

私はロンドンから帰国し、バガヴァンのご降誕祭の催し物に参加するためにブラシャーンティ・ニラヤムへ行きました。バガヴァンの邸宅の中で、私がバガヴァンの御前に立った時、バガヴァンはこうおっしゃいました。

「おや？ あなたはロンドンへ行ったようですね。お父さんから聞きましたよ」

すぐに私はバガヴァンの御足の元にひれ伏して許しを請いました。バガヴァンは唇に美しい笑みをたたえながら、

「ロンドンで、誰かあなたにスワミのことを尋ねませんでしたか？」と聞かれました。すべてをご存知であるバガヴァンの微笑みと意味深い質問は、すぐにハイド・パークで出会ったあの見知らぬ男性を思い起こさせました。スワミ以

外に、誰にこんなことができるでしょうか！ どのようにして、大海のような深いバガヴァンの慈悲にご恩返しすればよいのでしょうか！ バガヴァンは常に私たちと共にいて、まぶたが目を守るように、私たちを守ってくださっていることに気づかせてくださるのです！

清らかな心と純粋なハート、真実のみを話すこと、そして人類への奉仕に身体を使うことは、私たちをバガヴァンにとって愛しい者にするために欠かせない特質です。スワミの愛は自分自身の内側で感じられます。無知であるがために、私たちは幸せや心の平安が、すべての人々の内におわす神様の分かつことのできない属性であることを忘れ、外側の世界にそれらを探し求めます。内側に意識を向けたとき、初めて私たちは自分の内におわすバガヴァンを見つけることができるのです。

私たち皆の人生をバガヴァンのメッセージにして、神聖な人生を送りましょう。私たちが内側に意識を向けて、バガヴァンを自分のハートの内に見つけられますように、バガヴァンが私たちすべてを祝福してくださいますように、お祈り申し上げます。

(執筆者である R.J.ラトナカール氏はシュリ・サティヤ・サイ・セントラル・トラストの理事です)

出典：『サナータナ サーラティ』2012年11月特集号